

第19回 日本旅行医学会大会

デジタルポスター発表 抄録集

会 期:2021年4月10日(土)・11日(日)

オンデマンド配信 4月19日(月)～25日(日)

実施方法: オンライン Zoom 開催

第 15 回日本旅行医学会大会デジタルポスター発表 抄録集目次

1. 栃木県足利赤十字病院における 3 年間(2017～2019 年)のマダニ刺症 72 例の検討
ータカサゴキララマダニ刺症 62 例を中心に
自治医科大学健診センター 足利赤十字病院:島田 瑞穂
2. 海外渡航時の感染症と予防接種に対する大学生の意識調査
神戸大学大学院保健学研究科:三浦 靖史
3. コロナ禍での フィリピン新規クリニック開業の歩みと フィリピン医療事情 2020～2021
医療法人社団 豊愛会 豊北病院 :伊藤 實喜
4. 「世界旅行透析医療ネットワーク」の始動
医療法人 小山すぎの木クリニック :伊藤 壘
5. インバウンドツーリズム振興における日本の自然資産、森林浴の再定義と将来展望
英国ボーンマス大学ビジネススクール:大江 宏子
6. コロナ禍による在宅生活パーキンソン病患者の主観的幸福感の変化
旅行サービスじえふと:鈴木 洋平
7. 人工呼吸器対応のポータブル電源選び
ぎふ民間救急 株式会社ぎふ福祉タクシー:井深 公治
8. コロナ禍における国際医療搬送
インターナショナル ヘルスケア クリニック:鷺尾 美香
9. 《東京 2020 参画プログラム(教育分野)認証》
「医療英語・英会話」及び「スポーツ・ボランティア英会話」勉強会の参加者数推移と
アンケート調査解析 (第 2 回集計結果報告)
特定非営利活動法人医療英語学習支援協会:大森 厚子

【ポスター発表 整理番号 : 1】

発表者名 : 島田 瑞穂

所属 : 自治医科大学健診センター 足利赤十字病院

共同発表者名 : 川端寛樹 安藤秀二(国立感染症研究所)

彭 志中 小林由美江 廣瀬芳江 周藤史憲 清水和彦 高橋孝行 小松本悟
(足利赤十字病院)

抄録タイトル : 栃木県足利赤十字病院における3年間(2017~2019年)の
マダニ刺症72例の検討—タカサゴキララマダニ刺症62例を中心に—

【序文】

日本本土において、南方系の種であるタカサゴキララマダニ *Amblyomma testudinarium* は、九州から中部地方を中心に、関東以西でヒト刺症に至る種として知られ、ヒトに対し紅斑熱群リケツチアや重症熱性血小板減少症候群ウイルス(SFTSV)を媒介する可能性がある。栃木県足利赤十字病院では、2015年頃からマダニ刺症例が目立つようになり、栃木県ではヒト刺症報告がなかったタカサゴキララマダニが優占種であることが示唆された。また、切開切除に代わる安全な摘出方法の検討が望まれた。

【内容】

マダニ刺症の疫学情報集積と摘出方法の検討を目的として、2017年から3年間、足利赤十字病院を受診した全マダニ刺症例について、刺咬マダニ種、刺症者年齢と性別、体表刺症部位及び推定される受傷地を調べた。その結果、マダニ刺症72例は、3月から10月に発生し、5月と6月で44例(61%)を占め、タカサゴキララマダニが優占種 ($p < 0.0001$)、50歳以上が53例(74%)($p < 0.0001$)、女性が44例(61%)($p = 0.038$)であった。足利市内での受傷推定は59例あり、その内自宅周辺(畑または庭)の受傷が40例で、受傷推定地は、すべて足利市北部里山地域であった。

2017年の刺症25例では、切開切除が17例であったが、2019年は、病院として導入した tick remover による摘出が21例実施され、タカサゴキララマダニ雌成虫3例を含め、マダニ口下片の残存はなかった。栃木県内のタカサゴキララマダニ採集記録は1971年以来なく、2019年の県による植生マダニ調査でも本マダニは認められなかった。そのため、足利市北部里山地域において、タカサゴキララマダニによるヒト刺症発生の原因となり得る野生動物へのマダニ外部寄生調査が必要と考えた。現在、栃木県猟友会足利中央支部の協力を得て、捕獲された野生動物全頭を対象とした1年間の付着マダニ調査を行っている。

【結論】

栃木県足利赤十字病院におけるマダニ刺症の集積により、足利市北部里山(足尾山地支脈)地域において、栃木県でヒト刺症報告がなかった南方系の種であるタカサゴキララマダニによるヒト刺症が、5月と6月を中心に、里山地域の庭や畑などの自宅周辺を中心に発生していることがわかった。そのため、里山に近接する地域での活動後は、入浴時にマダニ刺症有無を自ら確認することが有益と考える。Tick remover は医療器具ではなく、購入・使用方法ともに、インターネット上に多数公開されており、非侵襲的にマダニを摘出する方法として有用である。

【ポスター発表 整理番号 : 2】

発表者名 : 三浦 靖史

所属 : 神戸大学大学院保健学研究科

共同発表者名 : 金山 美紗子(いくの眼科) 神岩本 麗美(大阪大学医学部附属病院看護部)

抄録タイトル : 海外渡航時の感染症と予防接種に対する大学生の意識調査

【序文】

近年、日本から海外へ渡航する人は1年間に延べ1600万人を超えている。10代と20代はそのうち24%を占めており、大学生の海外渡航の機会が増えていると考えられる。海外渡航中の感染症を避けるためには、渡航前からの準備と渡航中の健康管理を行うことが大切であり、そのためには、感染症と予防接種に関する知識が必要である。そこで、大学生を対象として、渡航経験、渡航前の準備内容、感染症に対する認識を調査することで、海外渡航中の感染症対策に関する大学生への啓発に役立つ要因を明らかにすることを目的とした。

【内容】

2019年9～10月に、大学生を対象とした、インターネット上でのアンケート調査を実施し統計学的に解析した。回答総数は1,183名、有効回答数は1,143名(96.6%)であった。大学生になってから海外渡航した者は60.6%で、渡航先での感染症に関心のある者は66.7%、自分が感染症にかかるかもしれないと思っている者は95.4%であった。渡航先により予防接種が推奨されていることを知っている者は57.0%であったが、実際に予防接種を受けた者は10.1%であった。旅先で自分も感染症にかかるかもしれないと感じている者は感染症に注意しようという意識が有意に高かった。予防接種を受けなかった理由としては、接種の推奨を知らなかった者が37.2%と最も多く、受けるのが面倒であった者が13.4%、どこで受けられるのか分からなかった者が9.0%、費用が惜しかった者が6.8%であった。渡航目的が観光の者より留学やボランティアの者の方が、感染症発生状況、予防接種、医療事情の情報を有意に多く収集し、渡航前ワクチンの接種率が有意に高かった。情報の入手先はブログや個人のホームページが70.5%と最も多く、ガイドブックやパンフレットが68.0%、友達や家族が44.1%、外務省は28.8%、厚生労働省は10.5%、医療機関は3.5%であった。

【結論】

大学生の感染症に関する認識は高いが、実際に渡航前に予防接種を受けた者は少なく、感染症に対する認識と対策の実践が一致していないことが明らかになった。大学生が感染症対策を実践できるように、その重要性和方法をインターネット等大学生が頻用する方法を通じて啓発することが有用であると考えられた。

【ポスター発表 整理番号 : 3】

発表者名 : 伊藤 實喜

所属 : 医療法人社団 豊愛会 豊北病院

共同発表者名 : 赤柴 豊明、魯 守洪、黒木 克哉

抄録タイトル : コロナ禍での フィリピン新規クリニック開業の歩みと フィリピン医療事情 2020～2021

【序文】

私達、医科歯科のグループは、NPO 日本フィリピン夢の架け橋を設立し、フィリピン貧困地区の医療ボランティア活動とマジックによる文化交流を約 20 年に渡り実践した。その間多くの仲間も増え、今後の活動をより良いものとするべく、拠点クリニックの必要性に至り、首都マニラに小さなクリニックを開設する事となった。しかし、世界的コロナ禍の為に、計画は大幅に遅れ約 1 年遅れの開業となり、今回はコロナ禍で開業に至った経緯とフィリピンの医療事情と今後の我々の活動計画を発表する。

【内容】

約 20 年前から、太平洋戦争の激戦地フィリピンレイテ島の慰霊活動から貧困地区の医科歯科医療ボランティア活動へと発展し、その間現地のドクターとコラボして、ルソン島、セブ島、レイテ島、ミンダナオ島合わせて約 30 箇所の貧困地区で医療とマジックショー(私は日本奇術協会の会員で Dr.Magic の芸名を有するマジシャンでもあります)を実践。フィリピンは国民皆保険制度を目指す、都市と地方の医療格差、慢性的な医師と看護師不足、30%の貧困層、今回のコロナ禍で特に貧困地区の医療行政は手付かずな状況である。2 年前からはフィリピン刑務所 3 箇所からのオファーもあり、その事から、いかにフィリピンの医療従事者が少ない事がわかる。その様な状況の中で我々外国人の医科歯科のグループが主にフィリピン貧困層の医療活動をさらに充実させる為にクリニック開設に至った。クリニック(内科、歯科、皮膚科、漢方科、スキンケア、再生医療【幹細胞治療】)はフィリピン人と韓国人と日本人の 3 カ国体制、場所はマニラの中心地で 3 月 11 日オープンとなった。

【結論】

- ①約 20 年間の貧困地区の医療ボランティア活動を通して、フィリピンマニラ首都圏に拠点活動のクリニックの開設に至ったが、ロックダウン下での新規開業は困難を極め、多くの仲間のご支援を頂いた。
- ②クリニック内に NPO 夢の架け橋の事務局を設置し、貧困地区の医療ボランティア活動を更に充実させる戦略室とした。実際フィリピンの刑務所からオファーを頂き、将来は貧困地区から優秀な人材を育成させて、日本語、介護、農業などの教育を行い、日本とフィリピンの架け橋になって頂く。
- ③フィリピンではコロナ感染者 66 万、死者 13000(3 月 20 日現在)だが、貧困地区での詳しいデータは不明でワクチン接種も遅れている。
- ④貧困地区では、安いお米が主食で甘い食材も多く、野菜や魚肉などの高い食材摂取が少なく、自覚症状もほとんどない『貧困糖尿病』が急増しており、正しい糖尿病の知識、食事と運動指導が急務であり、定期的に貧困地区の無料医療ボランティア活動を持続して糖尿病や循環障害の予防指導を行う予定ですので、学会の方々のご支援をよろしく申し上げます。

【ポスター発表 整理番号 : 4】

発表者名 : 伊藤 壘

所属 : 医療法人 小山すぎの木クリニック

共同発表者名 : 加賀誠 中田俊輔 趙相大 知久大輝 大島祐太 清水ひろえ 朝倉真希 朝倉伸司

抄録タイトル : 「世界旅行透析医療ネットワーク」の始動

【序文】

私たちは2020年の東京オリンピック・パラリンピックに対して、何らかの協力がしたいと考えました。私たちの強みを活かした腎臓領域・透析分野での医療支援で、オリンピックのサポートを行うことを目標に、2016年度より海外旅行透析事業を開始し、訪日外国人が多いアジアの地域を中心に活動をして参りました(当学会でも発表:第18回日本旅行医学会,第12回日本旅行医学会東京大会)。

【内容】

現在はコロナ禍で活動が休止状態ではありますが、コロナ前には韓国・台湾を中心に、双方の透析患者さんらが、私たちを通じて海外旅行透析を行い、存分に海外旅行を楽しまれ帰国しています。同じ人類ではありますが、国が違えば文化も違い、更には医療体制も違います。その医療体制の違いについても患者さんに説明し、安心して海外旅行が出来る取り組みをしています。

また私たちは、各国の透析患者さんが安心して海外旅行を楽しめるよう、各国の透析施設を訪問し、医療関係者や患者会の皆さんと語り、良好な関係を築いております。さらには海外であっても顔の見える医療をモットーに、信頼できる施設と医療協約(MOU)を締結しております。

【結論】

国内外の医療機関や医療関係者から私たちの活動への協力の申し出が増えたことから、「世界旅行透析医療ネットワーク」を設立。国際法に抵触しない規約の作製・ロゴマークの商標登録・ホームページを作製し、この事業に賛同して下さる世界の医療機関の皆様と共に活動を発展させていきたいと考えております。

【ポスター発表 整理番号 : 5】

発表者名 : 大江 宏子

所属 : 英国ボーンマス大学ビジネススクール

共同発表者名 : 山岡 泰幸

**抄録タイトル : インバウンドツーリズム振興における日本の自然資産、森林浴の再定義と将来展望
(An exploratory discussion of forest bathing effect in the disruptive environment:
Inbound tourism and Japanese nature)**

【序文】

本研究は、インバウンドツーリズム振興における日本の豊かな自然と文化資産の価値を、健康増進の視点から見直し、再定義することを目指す。今般のストレスフルな日々の暮らしにおいて、いかにストレスを軽減し、豊かな精神性をもつ生活していくかについては、様々な議論や施策がある。その中で、日本の森林等自然資産が有するリラックス効果を巡っては、1982年に当時の林野庁長官秋山氏が提唱した「森林浴」は、健康増進効果が期待できるとして関心と呼び、米国では Shinrin-Yoku が商標登録されるに至り、(2017年)、いまや、欧米では、日本以上に大きなブームとなっており、様々な関係団体が積極的に Shinrin-Yokuの推奨に努めている。

【内容】

森林浴や自然資産の持つ価値に関するアカデミアでの議論は、主に、人々のメンタルヘルスに対する側面的インパクトや、人々のこれへの期待の位相を巡る経験的な研究に集中している一方で、例えば英国では、王室が一翼を担うメンタルヘルス関連のイベント(Search: Heads Together: The Duke and Duchess of Cambridge and Prince Harry's campaign to end stigma around mental health)を皮切りに、キャサリン妃を中心に、毎年恒例のチェルシーフラワーショー(Chelsea Flower Show)における定期的な情報発信等が有名である。National Trust(正式名称は National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty)は、英国各地の自然豊かな地域の振興に努め、積極的な観光客、ハイカー誘致を行っている。本研究では、現在、世界的な関心と呼ぶ森林浴を巡る学術的議論及びその運用や人々との暮らしに根付く森林との関りを検討した上で、社会文化的視座から、改めて森林浴を位置づけ直し、観光振興における有力なファクターとしての森林浴や日本の自然資産の発揮すべき機能や意義を仮説的に検証する。これにあたっては、Forest therapy/Medicine あるいは alternative medicine としての機能に集中するのではなく、あくまで、社会文化的・学際的な見地から、日本のサブカルチャー、アニメにおける森林の捉えられ方、位置付けられ方にも言及しつつ、今後の旅行医学学会における活発な議論のためのインプットとして2つの議論の方向性を仮説的に提示する。

【結論】

本研究は、森林浴が包含する意味やインパクトを、インバウンドツーリズム振興の文脈に位置づけなおし、日本のサブカルチャーであるアニメにおける自然資産の扱われ方等にも言及しつつ、今後の研究発展の方向性を試験的に論じるものである。

【ポスター発表 整理番号 : 6】

発表者名 : 鈴木 洋平

所属 : 旅行サービスじえぶと

共同発表者名 : なし

抄録タイトル : コロナ禍による在宅生活パーキンソン病患者の主観的幸福感の変化

【序文】

新型コロナウイルスの蔓延による「コロナ禍」により外出制限・移動制限が余儀なくされてきた中、旅行業も自粛傾向にある。今回、在宅パーキンソン病患者がコロナ禍により今まで行けていた旅行が行けなくなったことで QOL が変化した一例を報告する。

【内容】

対象者:76 才女性(独居)

診断名:パーキンソン病(平成 24 年)yahr の分類Ⅲ。

ADL :全自立。日内変動と On-Off 現象が出現しやすい。

経過:平成 24 年の状態よりも進行しており Off 状態の時間が長くなる。コロナ禍以前は 2 ヶ月に 1 回の頻度で旅行や外出を楽しんでいた。

(方法)

QOL の評価は PGC モラールスケールを用いた点数化と本人のコロナ禍での気持ちを記述で文章化した。コロナ禍以前の 3 年前(平成 29 年 3 月)2 年前(平成 31 年 3 月)1 年前(令和 2 年 3 月)現在(令和 3 年 3 月)の主観的幸福感を比較。

コロナ禍前の 3 年間で計 22 回(3 名~7 名の高齢者・障害者グループ旅行)の日帰り旅行を実施。令和 2 年 3 月以降は 1 回のみ旅行を実施。全旅行で医療介護専門職が 1 名同行した。

【結論】

コロナ禍以前の 3 年前は PGC モラールスケールが 17 点満点中 7 点、2 年前は 16 点、1 年前は 17 点となり現在は 11 点となった。

経過症状はコロナ禍以降に薬の効果が表れにくくなり、薬の調整のため服薬の相談を主治医と行っている。

(考察)

地域在住高齢者の参考基準値が 17 点満点中 8~15 点とされており 2 年前は参考基準値を上回っていたが、コロナ禍以降は点数が 11 点と減少した。また、コロナ禍前よりも日内変動と On-Off 現象が著明に出現するようになり、筋緊張異常による脊椎側弯が認められるようになってきた。ご本人の記述では「思うように体が動かなくなった」「気分の落ち込みが激しい」などマイナス面の記述が多くあった。

旅行に行けなくなったことにより身体機能面と主観的幸福度に変化があったことに関連がある可能性があるが、今後は疾患や対象者を増やしていくことが課題となると考える。

【ポスター発表 整理番号 : 7】

発表者名 : 井深 公治

所属 : ぎふ民間救急 株式会社ぎふ福祉タクシー

共同発表者名 : 井深 五十美

抄録タイトル : 人工呼吸器対応のポータブル電源選び

【序文】

人工呼吸器搬送時に利用したポータブル電源が機能しなかったので選び方を考えました。人工呼吸器を付けたまま外出や旅行する患者様も多くなっている状況なので、外部電源のポータブル電源に絞った内容です。

【内容】

私どもが使用しているポータブル電源 powerark SmartTap 008601C-JPN-FS(以後 PO) が、IMI MONNALT60 人工呼吸器に反応せず、電源を供給できない事態ありました。内蔵バッテリーにより問題は起きませんでした。関係者様に変なご迷惑をお掛けいたしました。他メーカーは問題なかったのが大丈夫だろうと思っていました。事後、人工呼吸器メーカーやポータブル電源メーカーにも問合せしましたが、スペック上は問題ありません。と返答を頂きました。が、専門関係者(ME)様より、電源は様々(ポータブル電源、DC/AC インバーター等)、スペック上は問題なくても実際は反応しないものがある。付随機器(加湿器等)は良くてもダメの場合がある。と伺いました。その為、各方面スペシャリスト(ME、NICU、重心施設、ER、呼吸器内科、各メーカー、車イスメーカー)様のご意見を伺い、対策として、ポータブル電源 suaoki G500(以後 SU) に変更しました。この機種は多くの病院や患者様に選ばれています。そして 主な人工呼吸器(IMI MONNAL、チェスト VIVO、フィリップス Trilogy、コヴィディエン PuritanBennett)に問題なく実用されている事を確認しました。

【結論】

PO と SU のスペックを比べてみました。両方とも純正弦波、出力は同じくらい、容量は PO の方が多く、その為、単純に PO の方が長く使えます。違いは一つありました。電源周波数が、PO は 60Hz、SU は 50Hz/60Hz でした。IMI MONNALT60 は周波数はどちらも対応する。とのこと、最近の電化製品はどちらの周波数にも対応しています。しかし、断定はできませんが、周波数は 50Hz/60Hz 対応している方が良いということになりました。

【ポスター発表 整理番号 : 8】

発表者名 : 鷲尾 美香

所属 : インターナショナル ヘルスケア クリニック

共同発表者名 : なし

抄録タイトル : コロナ禍における国際医療搬送

【序文】

インターナショナルヘルスケアクリニックでは、2017 年より医療機関として国際医療搬送を行っている。COVID19 の世界的感染拡大においても国を跨いでの医療搬送のケースは存在している。そのコロナ禍における国際医療搬送について述べる。

【内容】

世界的に広がっている COVID19 感染により国交が減少している中においても、海外に滞在している日本人、日本に滞在している外国籍の方は存在し、国際医療搬送は行われている。当クリニックにおいても症例数は減っているものの 2020 年に9例を行っており、商用旅客機使用 7 例、チャーター機使用 2 例である。当クリニックにおいて、以前までは移送の相談を受けてから移送終了までの期間は、1～7 日間であったが、現在の状況においては、5 日間以上かかっている。また、入国制限や入国時の隔離など様々な問題点が生じてきている。当クリニックで経験したコロナ禍における国際医療搬送の変化と実際の症例について述べる。

【結論】

コロナ禍による国交の制限がある中においても国際医療搬送は、準備から移送終了までに期間を要し、その手順は増えているものの行うことは可能である。また、チャーター機のみならず、症例によっては、商用旅客機においても可能である。

【ポスター発表 整理番号 : 9】

発表者名 : 大森 厚子

所属 : 特定非営利活動法人医療英語学習支援協会

共同発表者名 : なし

抄録タイトル : 《東京 2020 参画プログラム(教育分野)認証》

「医療英語・英会話」及び「スポーツ・ボランティア英会話」勉強会の参加者数推移とアンケート調査解析 (第2回集計結果報告)

【序文】

2013年9月7日、「東京 2020 大会」の開催招致が決定した。当団体が任意団体として設立されたのも2013年である。同年9月に「医療英語・英会話」勉強会を開始し、2014年10月にはNPO法人として成立した。2015年9月、「スポーツ・ボランティア英会話(以下、スポ・ボラ英会話)」勉強会も開始した。2017年9月に、「東京 2020 参画プログラム(教育分野)」の認証を受けた。その後、アンケート調査を3か月間実施し、勉強会参加者の背景を解析して、第17回日本旅行医学会大会(2018年4月・東京)で発表する機会を得た。今回、第2回目の報告として、設立から2020年3月末まで、7年間に渡る勉強会の参加者数の推移と影響を及ぼすと想定される種々の要因との関連性を検討する。

【内容】

《目的》「東京 2020 大会」や「ラグビーワールドカップ 2019 (以下、RWC2019)」のボランティア募集、民間団体の「医療通訳士の資格試験・認定制度」等が、当団体勉強会の参加者数の推移や学習目的・動機に影響を及ぼしているか否か関連性を検討する。更に、初回アンケート調査時(2017年)とそれ以降2020年に至るまでの参加者の背景に差異があるか否かについても検討する。

《方法》参加者集計期間:2013年9月27日~2020年3月31日。対象:勉強会参加者(会員・非会員)。アンケート用紙配布期間:2017年11月30日~2020年3月31日。アンケート項目:21項目(#1~#21)。

《結果》参加者総数:「医療英語・英会話」2,614名(2013/9月~2020/3月末)、「スポ・ボラ英会話」629名(2015/9月~2020/3月末)。

アンケート解析:無作為 258名(2017年11月30日~2020年3月31日)。
[#7 職業]会社員:58名・教員:5名・医療従事者/職員:102名・学生/院生:15名・公務員/団体職員:10名・その他(主婦・退職者):63名・無回答:5名
[#21 学習の目的・動機](複数回答可)仕事に必要:93名・ボランティアに必要:75名・資格/試験のため:37名・生涯学習:135名・趣味/教養:58名・その他:18名。

《考察》「スポ・ボラ英会話」勉強会の参加者数が2017年に倍増した要因は、同年、ボランティア募集開始期日が、「RWC2019は2018年4月から」、「東京 2020 大会は2018年9月から」と発表されたことで、「スポ・ボラ英会話」学習に興味・関心のある参加者が集まったものと推察される。

【結論】

「スポ・ボラ英会話」勉強会参加者数の推移は、「RWC2019」や「東京 2020 大会」のボランティア募集の関連事業から影響を受け、短期的かつ直接的な学習目的であることが示唆された。「医療英語・英会話」勉強会の学習目的・動機は、資格試験等からは顕著な影響を受けず、生涯学習として長期的展望で継続学習していることが示唆された。

日本旅行医学会事務局

〒151-0051

東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-11-6 第二シャトゥ千宗 202

(TEL) 03-5411-2144 (FAX) 03-3403-5861